

# 佐藤文隆氏ロングインタビュー

## 第9回：京都大学教授時代



高橋 慶太郎

〈熊本大学大学院先端科学研究部 〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪 2-39-1〉  
e-mail: keitaro@kumamoto-u.ac.jp

佐藤文隆氏のインタビューの第9回です。佐藤氏は1985年に京都大学理学部の天体核研究室に教授として着任し、16年ほど勤めました。前回伺ったように、この間に超新星1987Aが起これ後の日本の観測的研究に大きな影響を与えるような研究活動を行いました。一方で佐藤氏は教授として、そして理学部長として学内の様々な業務・問題にも尽力します。今回は研究から少し離れて、京都大学での教育、大学入試、高校物理の教科書、大学院重点化、学内の土地問題など、1990年代の大学の様子を伺います。

### ●京都大学での授業

高橋：前は京都大学の天体核研究室の教授になって、割とすぐ超新星1987Aが起これてガンマ線観測のためにニュージーランドに行って、という研究のお話をメインにお聞きしました。今回は研究以外のこと、大学内でのことなどをお聞きしたいと思います。例えば授業なんかはどうでしょうか？

佐藤：僕の京大の授業というと、学内でも名物授業になったのは「力学2」とかいったけど、要するに解析力学の半年の講義です。あれは2年生の後期やったと思うけどね、だから教養からも聴きに來てたね、それと数学とか工学部の学生も聞いてみたいで、ものすごかったですよ。理学部でだいたいまあいつも50、60人はおる授業というのは学部の授業じゃ珍しくて100人くらいおった。それで試験になると200人くらい來て、その講義室だけじゃなくてね、4つくらい部屋が要るんです。それで助手だった山田（良透）君と西（亮一）君と3人、その部屋の監督でいるみたい

だね。それ12年続いたかな。

高橋：だいぶ長くやったんですね。それはどういう授業だったんですか？

佐藤：解析力学ってまあ抽象的やからですね、抽象的な考え方の入り口やね。物理ってこう生々しく見ると、それをまるっきり抽象化した世界に映すのどある。でまあ解析力学っていうのは抽象化の第一歩で、どいうのを強調しましたね。だから最初にみんなを笑わす、受けのよかったのは、「この解析力学というのは、自然をありのままに見ない修行をする」。よく理科とかいうのは自然を見て、とかいうけどそうでなくて、ありのままに見ない訓練やと。だから「これを面白いと思った人は理論に行けばいいけど、そうでない人はあんまり無理して行かんでもええ」と（笑）。後で僕、『岩波講座物理の世界』の『運動と力学』というのを書いたんだけど、編集者が帯を「自然をありのままに見ない修行」って書いてた。

高橋：なんか変わったやり方で教えたんですか？

佐藤：いやいやそんなことないけど、内容的にはやっぱり結構抽象的にやりました。抽象的なもの

面白さみたいな。だから放物線って空間で物体がこう飛ぶという、曲線自体が非常にリアルな世界のことですよ。その物体が上がって落ちてくるといふ曲線を $x$ （座標）と $p$ （運動量）の相空間に書くとかね。そういう抽象化っていうか間近に見るものでない空間を考えるということですね。そんな点を強調しまして、自分でも面白かったね。しかも長くやったからそれが1番の思い出やな。

## ●大学入試問題

高橋：では大学入試は何か思い出はありますか？

佐藤：大学入試は大ありや。まあ京大みたいに大きな大学だと義務的にはそう回ってこないんですけどね。みんな嫌がってるし。僕は手挙げて、平均より1.5倍くらいやったですよ、問題作成。面白いのはね、京大で物理の問題を作る教員は理学部と教養の物理で半分なのね。あと半分は工学部。電気とか土木とかみんな物理やから。僕はそこへ出て行ってちょっとハツとしたというか、気づかされたときあったですね。「ああそういえば工学部の半分は物理学なんだ」と思ったですね。高校生にとって理科は物化生地という科目ですよ。で、よく物理学と言っちゃうと、理学部の物理を思い浮かべるやん。だけど高校生にとって物理の大部分は工学部なんだな。

高橋：そうですね、人数的にはそうですね。

佐藤：人数的にも、人材的にも。実際に京大の中で理学部の物理なんて大きいのに、問題作成委員会は教養と足して半分なんだ。まあ教養におるのはだいたい理学部系の人がおる。もう半分は工学部。だから高校生とか教育界から見ての物理っていうのは、理学部だけではないんだなという認識をしたですね。生物なんかもっとですよ。理学部の生物なんて小さいから、農学部医学部ですよ、生物の問題作ってるのは。

高橋：そうなりますよね。

佐藤：うん。ところが高校生の生物の試験とかいうと理学部の生物の先生が作ってると思われてる、

何となく。まあそこらへんが印象としてあったね。

で、どうも僕は教育とかそういうのに熱心やみみたいな話が外に伝わってて、学部長が終わった年に、大学入試センターの委員になれ言うてきたんですよ。僕の知らない物理屋が頼んできましたけど。それで後で話すけど、学部長のときちょうど大学院重点化で、学部のあちこちにまあストレスが溜まった。僕は定年間際でないときに学部長したから、あと3年かそこらまだ大学にいなきゃいかんかったからね、できるだけ学内の委員会に出なくていいようにしようと思って、その話がきたとき「ああこれええわ」って（笑）。

高橋：ああ、学内の会議をさぼれるということですか？

佐藤：うん。で、2年やったんかな。最初は大学入試センターの物理部の副部長で、2年目は部長。で月1ぺん東京の駒場に2,3日通うんだね。それでまあ引き受けたんだけど、2年目はなんかセンター全体のもっと上の方の委員になった。だから2年目のセンター試験の当日は本部詰めやったね。

高橋：センター試験の問題を作るっていうのはやっぱりかなり気を遣うものですか？

佐藤：うん。ただなんていうかなあ、たくさんの人でやるから。

高橋：何人くらいいるんですか、物理の委員は。

佐藤：物理で20人くらいちゃうかなあ。初め各自で考えて持ち寄って、それでだんだん落としていって絞っていく。まああんなだけの人の目で見れば、集団的にできていくという感じでしたね。京大の二次試験だと問題ごとに担当を分けちゃって、1つの問題にせいぜい4,5人だったような気がするね。それだときどき見落としがある。センター入試の方はあんなだけ大勢で何回も見てたら見落としがあるという心配はないなと思ったな。ただ、だんだん個性のない問題に変わっていくというプロセスやったなあ。

高橋：まあセンターはそうですね。佐藤さんが作った問題は個性のある問題だったんですか？

佐藤: いや, そんなに. センター入試でまず1問出そうみたいなときは, 要するにどうせ高校物理なんてのは放物線の話しかないからね. それをさっき解析力学で言うたみたいに $x$ と $p$ で書くという問題を作った. そしたら全然不評で, 最初にボツになった (笑).

高橋: センターだとそういうのはちょっと難しいですよ (笑).

## ●高校物理教科書

佐藤: そのあと実教出版っていう高校の教科書会社の物理の編集委員みたいなのに声がかかったんだけど, それはそのセンター入試をやってたからだね. 定年のあたりやけど, 10年以上やってたです (写真1). もともとそっちの系統だったらしくて, 一般の高校物理にも進出したんだけど, シェアとしてはいつも3番目か4番目くらいで. そのときの編集者は大学の先生では僕ともう1人, 東大駒場の実験の先生やった. あとは高校の先生が10人くらいかな. 実際を書くのは高校の先生の場合が多い. 高校の先生で熱心な, 教育大付属の先生もおったし, 普通の高校の先生よりはるかに物理教育に熱心な人を教科書会社が集めてくる. まあ教科書会社もいくつかあるわけだから, 取り合いらしいけど. まあでも高校の教育の実情みたいなのが聞けて面白かった.

で, 教科書の編集はだいたい今あるのをどう変えるかみたいな, ゼロからというのはあんまりなかった. ちょっとずつ変える. 教科書の中身はほんまに動かせないというか, 動かすと必ず検定のときに注意がつくんですよ. 僕は検定, 3, 4回出たかな.

高橋: 何を注意されるんですか?

佐藤: やっぱり新しい視点を入れると, 必ずなんか注文が出る. おかしいんじゃないとか, 高校生のレベルに合うかとかそういう感じなので, だから何となく変え難い, 変えるのが難しい. ああいうプロセスだと億劫になるね. 何も変えなきゃ何



写真1 編集で関わった高校教科書の一部 (佐藤氏提供).

も言われなからみたいな.

高橋: 検定官はどういう人なんですか?

佐藤: あのおね, 興味ありますよね. 1つは高専の先生. で, 私立国公立含めて大学の先生はめったにないですね. だから高専の先生と, それとやっぱり高校のベテランみたいな, だと思っうね. 大学の先生はまあおるけども例外的やったと思う.

高橋: そういうものなんですか. ではあんまり自分の色を出せるような感じじゃないんですか.

佐藤: 自分の色を出したっていう感じはなにもない.

高橋: 最近の高校の教科書は写真がいっぱいでとてもきれいですよね. 結構最先端の話が紹介されてたりするのでその編集はもっと楽しいものかと思っていました.

佐藤: いやあ, 教科書業界は今もう青息吐息なんやね. 生徒がいなくなったから.

高橋: 少子化で, しかも物理の履修率が低くなったり.

佐藤: 物理は特に少ないけど, まあそれ以上にとにかく絶対数が減ってるでしょ. 第二次ベビーブーム (1971-1974年生まれ) とかいうのは200万おったわけ. それが今は80万切ったとかいうんだから. 絶対数がそんだけ少なくなってる. しかも教科書は学生にしか売らないんだからね. だからもろに業界全体がもう….

高橋: 半分以下ですよ. 佐藤さんが京大の教授

だった頃はまだ結構学生が多い頃ですよ。

**佐藤:** 第二次ベビーブームが大学にくるあたりってちょうど1990年代の差しかかりなんですね。僕が学部に関わったり学部長になったりしているときに、国立大はそれを受けるために一時的に教員のポストが増えたんですよ。それでベビーブームの山を過ぎたら、その定員も減らすからみたいな。だから定年前の助教授を教授にしたりしてたね。あれから以後はずうっと減りっぱなしでしょ。とにかく理学部がどうの物理がどうのいう前に絶対数が減ってるから、大学は不況業種なんですよ。

**高橋:** じゃあ出版社は結構大変なんですね。

**佐藤:** 教科書会社大変でしょ。きっといくつか合体するんだろうなあ。もたないでしょう、あんだけ人抱えて。

**高橋:** 高校の物理教育の現状を見て、どうでした？履修率が減っているということもありますけど。

**佐藤:** 高校物理の低落と改革については他で書いたことあるけど [1], やっぱ物理が生き延びるには情報とオーバーラップさせることなんだろうと僕は思うね。なんていうかなあ、情報の確率とかエントロピーとかいうのはやっぱり数学でしょ。物理もどうせ数学を使う、そこは逃れられないんだから、同じく数学を使わなきゃいけない情報と一体化する。一体化っていうかもちろん違うんだけど、数学を使うということの関連でもっと連携すべきと思うね。まあ少なくともボルツマン分布が出てくるあたりまで物理は確率とか教えんといかんような気はしたね。今の物理はそっち系が抜けてますよね。統計の話っていうのは要るんじゃないかなあ。力学、熱力学はもっと小さくして、ウェイトを小さくして、統計でいいと思うんだけどね。

**高橋:** 高校物理の内容ってもうだいふ長いこと変わってないんですかね？

**佐藤:** 変わってない。大正時代と一緒に、ほんまに。

## ●大学院重点化

**高橋:** 佐藤さんは理学部長を務めたんですよ。その辺の話はいかがですか？

**佐藤:** 僕は基研から理学部に来てすぐに理学部の評議員とかになって、その後理学部長になった。1993年4月から1995年の3月まででしたね。よく覚えているのは、阪神淡路の大震災が、その1995年の1月でしたからね。

**高橋:** 理学部長として、何か大きなことはありましたか？

**佐藤:** 学部長のときは大学院重点化ってやつですね。これははじめ、妙に変なことから始まったんですよ。あまり知られてないけど、こんな大きな話になるとは誰も思わなかったんじゃないかと。あのとき法科大学院っていうのができたんです。あれは司法試験改革みたいなんで、司法試験で延々と浪人してがんばってというんじゃないくて、大学院というところである程度学業を終えたら、それが有効になるような制度に変えようということだったんでしょうね。それで東大とか京大の法学部が法科大学院というのを作るとき、その教員の身分をめぐってなんかちょっと新しい制度ができたんでしょ。今までは学部の教員が大学院を兼担しているというのを、大学院の教員が学部を兼担するというふうに読み替えようみたいな、なんか考えた人がおるんですね。

**高橋:** 法学部から始まって、他の学部もということなんですか。

**佐藤:** 法学部でできたその制度を使って、他の学部の連中でも待遇改善になる。月給の俸給表が変わるからね。で、ぎーっと広まったんでしょね。東大はしょっぱなでほとんど何の審査もなしでやったら、もう全国の大学が一斉に「俺のところも」という。それで「文部省で審査してどこから認可するか決めます」とか言うんだけど、そんな決められるはずないですよ。結局は大学の設置順です。日本では最初に東大が設置され

て、20年ほど遅れて京大、それから東北大なんです。

**高橋:** 設置された順番でその後も新しい制度が導入されていくってことですね。審査というより。

**佐藤:** だってあんなもの、教員の論文リストとかなんかワットと出させたって誰が見るねん(笑)。論文が多いのか少ないのかなんてのは全部統計を取ってみたいとわからん。だから僕も理学部の評議員の頃から巻き込まれたけど、「どうせ設置順だよ」と。だから筑波なんて割合大きいけど設置順でいうと遅いから、みたいな。

**高橋:** 実質的に審査はないようなものなんですね。

**佐藤:** いや「これからは設置順とか旧帝大とか、そう経緯は一切考慮せず厳正に審査する」って意気込んでいたから膨大な審査資料を準備させられたよね。その後それが定番になっていったけど、当時はあんな膨大な書類を誰が読むのかと思ったね。それである程度そういうのが実質化してきたんだろうけど、教授連中がみんな忙しくなったな。審査ばかりさせられて。定年の前後に僕も大学評価のはしりに動員されてもう言う気力もなかったけど、これは大変な時代になるなど思ったね。だって審査なんて真面目にやれば大変なことですよ。だからそれが難しいから途中からほとんど数値化して、なんかAIでも分かるみたいな、だんだんそっちに流れるんでしょうね。

**高橋:** 教員はそれで給料が上がったんですか？

**佐藤:** 上がったでしょう。その大学院重点化になった大学の教員は。

**高橋:** どれくらい上がったんですか？

**佐藤:** いやあ、知らない。上がったんだと思うけど、全然そんな感覚はなかったね。それと急に「京都大学大学院教授」と書くようになったよね。あんなにかっこ悪いよね、僕なんかの感覚からすると。

**高橋:** 長くなりますよね。

**佐藤:** 長くなって、「京都大学教授」の方がかっこいいやんと思うけど。

**高橋:** まあでも多少給料が上がったとして、大学

の教員全体でいったら結構な人数なわけじゃないですか。それは国の方は文句言わないんですか？

**佐藤:** あの頃はよかったんでしょうね。いろんなことよかったと思うわ、1990年代で。前も言ったけど、1980年代っていうのは日本はほんまにナンバー1だったわけね。ただ国際的な風当たりも強くて、日米貿易摩擦っていうのがあった。アメリカの経済界が「日本はアメリカの基礎研究の上に立って半導体産業で儲けてる」と。それで基礎科学タダノリ論というのを盛んにワットとやったわけね。それでさんざんやられたから、日本の大学も基礎研究にお金を出さんといかんのや、という学者の方の声がある程度通じていった。その時期ですよ。なんかいいアイデアないかみたいなんで。COE (Center of Excellence) が始まるのもこの効果。それと有馬文部大臣(1998年7月-1999年10月)のときには大学の建物の老朽化をアピールして校舎改築が始まった。それが不況への景気対策にもなったんです。

1990年代って特に阪神淡路の前あたりっていうのは、なんか大型の物性実験なんかの装置が次々更新されていったですね。工学部とか理学部の物理とか化学、あの周りはずっと朝出勤するとクレーン車が停まっててみたい。今度なんかえらい機械入るんやなあ」って言ったら、「前から言ってたのが通ってね」とかいうみたいな話が多かったですね。だから要するに原子核とか素粒子とか天文とかいうのは大きな共同施設を作るとかいう話やから、学術会議を通して長いことかかるがな。けど物性とか化学とかはだいたい1研究室でやってるところが多いでしょ。それで装置を入れていろんなことやるみたいな。だからああいうのは一時的な補正予算とかなんかのときに対応しやすいんだね。あの頃景気よかったですよ。それでまあ文系とか自然科学でも理論系はそういう恩恵がないから、全体のシステムを変えることで恩恵があったんやないかと思うねえ。

**高橋:** たぶん1990年代は世の中としてはバブル

が終わって、結構不景気になってる頃ですよ。

**佐藤:** うん、だけどあの頃大学内は景気良かったですよ。校舎更新はゼネコンの不況対策でもあったんじゃない。世間のムードにしたってまだ庶民も海外旅行にうつつを抜かしてた。出入りの近ツリ（近畿日本ツーリスト）の営業マンが「今は企業より京大さんが一番の得意先や」って言うてるのを聞いたことあったね。ムードが変わるのはやっぱり阪神淡路のあたりからですよ。まあそれで東大が制度を変えて、今度はすぐに京大が進みだすということで、僕の前前の学部長から動いたんだけどなんかうまくまとまらなくて、結局僕が学部長のときに最終案がまわってきたんやな。まあどうせ通るに決まってるから、僕はできるだけ書類を作らなくて済ませるみたいな抵抗をしたくらいやね。書類を出すのを渋ってなんかいろいろ悶着があって、そこでなんか啖呵切って書類出さずに済んだくらいですよ。その同じ年度に通った東北大学の学部長が後で、「へえ、あれ出さんでよかったんですか」とか言って（笑）。

**高橋:** 大学全体で出すわけですか？

**佐藤:** いや、学部ごと。理学部は早かったね。まあ重点化の中身は大講座にするくらいで、単に組み換えだったね。月給だけがちょっとよくなったという感じなんですよ。

**高橋:** 仕事の内容は別に変わらないわけですね。

**佐藤:** 京大の理学部あたりは何も変わらなかったね。正確にいうと実は学科制を廃止したんです。1960年末の紛争時に実質そうなったのを、フォーマルにした。あとはまあ講座当たりの予算が増えました。最初の年に増えて、僕の学部長2年目の途中で予算がきたのかな。で、増えたのをどのように教室に配分するかみたいなことが決められないので、まあその年度は学部長が適当に決めてくださいということになってね。それは僕が学部長のときの非常に悩んだ仕事で面白かったんだけど、評議員の鎮西（清高）さんに相談した。彼は地質の化石とかの専門家で、科学博物館みた

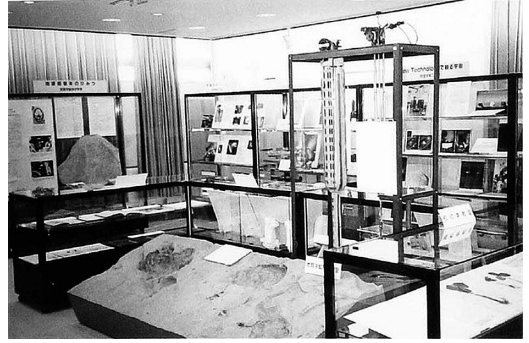


写真2 理学ミニ博物館（佐藤氏提供）。理学研究科によって1995年に理学1号館5階に開設された。

いなこの専門家でもあって、その人がそのお金で理学部のミニ博物館を作ろうと言い出した。それで彼が駆けずり回って各教室から珍しい宝物みたいなのを集めて、余った部屋を使って展示した（写真2）。まあこれは彼の力だね。ある種理学部で歴史を引っ張り出して自慢大会やったみたいな。鎮西さんはその後学部長になって、全学にも働きかけて博物館の話が進んで、結局京大の総合博物館というのが彼が定年の間にできたんだね。

**高橋:** え、あの総合博物館になったんですか？

**佐藤:** うん、その後ね。その流れなんですよ。

**高橋:** へえ、先にその理学部の小さいのができて。

**佐藤:** そう、ミニ博物館と称してたのがね。だから講座当たりの単価がちょっと増えて、なんか年度の途中だったもんだから、この年だけは学部長の好きなように使ってくださいと言うて鎮西さんとそれをやったんです。面白かった、楽しかったですよ。

**高橋:** 物理は何か展示するものがあったんですか？

**佐藤:** 物理もなんかあったですよ。小山（勝二）君の観測装置とかね。

**高橋:** それ結構評判がよかったってことなんです。ところで大学院重点化ってことですけど、大学院はどう重点化されたんですか？

**佐藤:** うん。文部省はその重点化になった後は定

員がちゃんと埋まってるかの厳正なチェックをやり出したね。ドクターコースの3年間の定員がちゃんと埋まってるかみたいなの。だって重点化したいと言ってきたんだから。京大の物理あたりはもともと志願者が十分で、試験して落とすたくらいやから何も気づかなかったんだけど、京大でも特に工学部あたりはドクターコースの志願者がほとんどいかなかったよね。工学部はあの頃はマスターを出て会社のエリートになっていく、ドクターまでおったらもう云々という感じやったからね。だからそういうところは一生懸命定員を埋めさせられた。就職すると言った学生を残したりしてね。工学部とか、まあ理学部の一部でもそんなにドクターまで行かなかったね。それでドクターまで行った学生が増えて世の中に出たとき、今度はOD（オーバードクター）問題ですわね。

**高橋:** 重点化のときにドクターの定員を増やしたわけではないんですか？

**佐藤:** 増やしたわけではない。

**高橋:** これまでの定員がちゃんと埋まるようにと。

**佐藤:** 埋まるようにチェックが厳しくなった。ほんまに厳しかったらしいね。重点化したいと言ってきたから変えたんだから、満たさんかったら外すみたいなの。それがやけに厳しかったみたいなの。それまで全国的に大学院を作ったけどもそんなに埋まっははいないんだみたいなのところは多かったでしょう。そんなんきちんと埋めさせられたんです。だから東大とか京大とかもともと落とすくらいきちんと埋まってたところは、そんなことが起きてんのみみたいな、後から気がついたくらいだけど、日本全体としてみると重点化して影響が大きかったんやな。一時大学院生がふーっと増えたのはそれや。

**高橋:** もともと教員側はそんなことを意図してやってないわけですね？ 単にちょっと給料上がるだろうみたいな。

**佐藤:** そうです。

**高橋:** それで博士を埋めることになり、だんだんOD問題が大きくなるわけですね。

**佐藤:** うん、全国的に見るとね。横並びの弱点だよ。これがその後の問題の発端だと思うよね。

**高橋:** 物理はたくさん院生がいたということでしたけど、大学院に行つて研究者を目指すような人がそのころ増えてきたんですか？

**佐藤:** 増えてきたでしょ。1970年代に入つたころから急に増えてきたねえ。入試の倍率も志願者も多かった。急になんか僕も怖いなど感じたことがあるね [2]。だって1960年代なんてのはね、京大あたりでも大学院の倍率はそんなに高くなかったよ。高くなかつたっていうかむしろ研究室によっては誰も受験しないみたいなの。それがなんか1970年代から放つておいてもじわじわじわっと増えてきて、やっぱり1980年あたりを境に急に増えてきたような気がしたなあ。これは大学が旗を振つたんじゃないかとて社会現象だと思う。日本のバブルのときですよ。怖い感じがしたな、僕は。将来どうなるんやろうみたいなね。

それからあの頃ね、学振のポスドクも急に増えたんだ。うちが増えただけじゃなくて、卒全体が。それで急に天体核研究室にはいろんな人がやってくるようになったね。だから1990年あたりなんていうのは、院生と同数くらい他の大学からポスドクがきてて。まあ京都は基研もあつて刺激のあるところやから人気もあつたんだろうけども、京大出身でないいろんな人間が、僕も覚えていないくらい、なんかこう通過していったという時期があつたですね。だから天体核のコロキウムもなんかまあ多様になったといえは多様だけでも、散漫になったといえは散漫になった感じはあつたね。あれは学振の制度でそういうのが急に増えたから。増えすぎて後で問題が起こつたりしてる（笑）。

**高橋:** 院生が増えて、学振ポスドクの枠も増えてきたわけですね。

**佐藤:** まあ増えて初めの方はみんないい気分だつ

た。だけど5,6年経つとポストクの後はどうなるっていうのでみんな深刻になるんだ。

## ●基研と理論研の合併

佐藤: それと京大の理学部長のときに一番大変だったのは、京大の基研の土地問題です。1年もかかった。

高橋: 土地問題ですか?

佐藤: うん。基研の土地問題っていうのは、基研が広島理論研と合併して、だから建物を大きくせんといかんわけね。

高橋: 広島大学の理論物理学研究所と合併したということですよ。1990年ですから佐藤さんが学部長になる前ですね。

佐藤: あれは行革で文部省の指示で広島の研究所を整理して京大にくっつけるというので、まあ降ってきた話なんですよ。基研が希望したとか、研究者の間で話が整ったとかでは全然ない。だから文部省も大きな建物を建てる予算をすぐつけた。ところが土地がないわけね。京大の中で基研なんてのは全く地主じゃないのよね。地主じゃないっていうか、よそ者みたいなもんなんだ。あのときそれに気付かされたんだけど、だから合併して広島理論研からきた人はまず宇治に置かれたんです。

高橋: ああ、そうなんですか。

佐藤: うん。で、北白川の基研を大きくするか、それとも基研自体が宇治に移って一体となるか、というので2年くらいサスペンドされた。だから文部省がつけた予算を京大が執行できない。あのころその責任にあるのは京大の施設部長という官僚なんだけども、更迭されたんですよ。地方の事務長みたいなのに左遷されたの。だって文部省から予算をつけてあるのに執行できないんだもの。執行できないっていうのが2年くらい続いた。

高橋: 研究者の中で宇治に移るかどうかが揉めてたってことですか?

佐藤: いやいや、そんなことを研究者が決められるはずないじゃないですか。京大内の土地をなんとか

する力なんてないんだから。

高橋: じゃあ施設部長が決めるっていうことなんですか?

佐藤: いや、そこや。そこを誰もわかっていなかった。それは理学部長が決めることなんですよ。

高橋: え、そうなんですか?

佐藤: そうなんですか、となるよね。基研ってちゃんと所長がおるのに。所長が総長に要求すべき話ですよ。ところが当時は地主は学部であって総長ではない。だから総長管轄の宇治に移るなら即決できるけど、北白川での土地となると理学部から出すか、農学部から分捕ってくるかっていう話になる。昔、湯川記念館ができたときっていうのは京大が作ったんじゃないで、上から降ってきた。でまあ理学部の分野だから、理学部の植物園の一部を潰した。基研が湯川記念館だった頃ね。それでずうっときてた。それが今度、基研を大きくしなきゃいけない。そしたら理学部の植物園をもっと潰すか、湯川記念館に引っついてる農学部の土地をかつぱらってくるかどっちかなわけね。

で、予算を執行できないという状況で京大本部の方ももう切羽詰まってるんでしょ。前の理学部長にも頼んでたんだけど、他の分野の人だったから「それは大変ですね」みたいな感じで全然取り組まなかったんだね。だから僕が学部長になったとたんに、まあ基研関係者やからね、こいつにやらせないとだめやと思ったんでしょね。それでも施設部が拝み倒してきて、もう文部省からにらまれてるんだ。他の予算も付きにくくなるとか言われてね。で、理学部の植物園は裏が池みたいな沼地で、ちょっと物理的に大変なものあって、後で新館が建った場所はもとは農学部の土地で当時空いてたんですね。

高橋: そうなんですか。

佐藤: うん、畑にもなっていてバラックみたいな作業所があっただけ。だから僕はそこを狙って、なんやかんや土地の委員会作ったの。「土地



は農学部のものじゃなくて国のものや」とかわけのわからん屁理屈を立ててですね、農学部長さんは学士院賞貰ってるような立派な学者さんだったけど、彼が途中から出てこなくなったから、まあ逆に決めることができたんだけどね（笑）。農学部長室に何回も押しかけるんだけどいつも避けられてた。それで1年かかって委員会の合意を取り付けたんですよ。あれは大変だったなあ。次の農学部長さんに、ありがとうございます、いうてお礼に行ったけど、だから基研の人が決めるんじゃないんですよ。基研の長岡（洋介）所長が本部に行っても、理学部長に頼んでくださいと言われるだけなんです。それで長岡さんは僕に任せてくれた。不思議な話でしょう。

**高橋:** 基研は理学部の附置じゃなくて、理学部と対等なんですよな？

**佐藤:** そうそう。

**高橋:** 基研の土地問題は本来理学部とは関係ないってことなんですよな。

**佐藤:** うん、形の上ではね。だけど全然違うんです。基研の所長に後で聞いたら、初めから施設部は基研所長のところには相談にもきていない。みんな理学部や、そらそういうもんなんやなど僕も初めて気がついたけどね。

**高橋:** 京大内で基研が、なんというか、あまり力を持ってなかったということなんですか？

**佐藤:** そうでしょう。特に土地問題なんてのは各学部がこの土地この土地って昔の大名みたいで、後からきた人は土地がないわけですよ。

**高橋:** 歴史が浅いからってことですか。

**佐藤:** うん、だから土地はどっかに分けてもらって、借家みたいな、そういう意識なんでしょうね。

**高橋:** ああ。でも基研は日本初のノーベル賞でっていうので、学問の格としてはすごいわけじゃないですか。

**佐藤:** いやいや、最初の湯川記念館の建物は、ノーベル賞記念で京大が建てたんです。そのときは、共同利用研という話はまだないんです。だか

ら初めは単に京大の記念館。基研の年表を見るとわかるけども、1, 2年遅れて学術会議で共同利用研を作ろうという話があって、それで京大が「新しい研究所にこの湯川記念館を使ってください」と。だから共同利用研を作るとなってからあの建物が建ったのではない。数研（数理解析研究所）もそうです。数研も理学部の植物園を削ったんですよ。「物理と数学はこれ以上植物園に土地をくれとは絶対に言わないという約束がある」とか言われた。これが大変やったね。だから基研の関係者なんてのは、どっかから土地が降ってきたみたいに思ってるけど、全然違うんだ。なんかまったく理屈のないことを振り回して、強引なことをやったと思うな。

**高橋:** 今はさらにその隣もありますよね。

**佐藤:** そうそう、あれは小林・益川ノーベル賞を機に北部の共同の建物を建てて、会議場を益川ホールとした。だからそのあと農学部はむしろ金さえくれれば、みたいに変わったんですよ。ほかにも農学部の土地に農学部、医学部、理学部共同で生命科学研究所ができたしね。

**高橋:** それは農学部から土地をもらう代わりにお金を、ということですか？

**佐藤:** いや、生命科学研究所は三学部合同で新研究所を作ったわけで、農学部の発展でもある。それに比べて基研の場合は取られればなしなわけ。だから結局はお金で手をうったんです。だからあのとき最先端の温室みたいなのがザーッとできてたね。施設部が、「農学部がこんなものを要求してきて、先生なんか言ってください」って言ってきたけど、僕は知らん言うて。だから農学部に言われるだけの設備のお金を文部省から取ってきて、何とか実現したんじゃないかなあ。まあそういう感じのパートナーというか、そうでないともう基研全体が宇治に行くという話に動き出してた。宇治にはなんぼでも土地あるからね。僕は個人的にも頑張ってた良かったと満足ですよ。

**高橋:** 理論研と合併するっていうのは、国から

トップダウンでということだったんですよね？

佐藤: そう, 土光臨調の行革です. あの頃いっぱい研究所の整理があった. 前も言ったけど宇宙線研究所もリストに載ってて, 超新星 1987A のニュートリノで助かった.

高橋: 理論研もいい研究所だったという話を聞いてますけど, どうだったんですか？

佐藤: あのう, あるときまではとにかく行ったらもう出れないみたいな感じだったですよ. だから富松(彰)君が助手で行ったときもそうで, それまでは成相(秀一)さんが1人で, 富田(憲二)君が行ってもやっぱり雰囲気変えるまではならなかったね. そのうちに雰囲気変わるのはね, 創設者の三村所長時代からの人が定年でシューっと抜けて行って, 藤川(和男)さんとか素粒子の人が入ってそれでガラッと変わったんですよ. それからは全く広大, 理論研と関係ないような人がハッと入ったわけね. だから藤川さんの影響が大きかったんじゃないかな. それで次々と佐々木(節)君も行ったり, 細谷(暁夫)君なんかも一時おったりした. とにかく石原(秀樹)とか, 杉山(直)とか, 中尾(憲一)とか, 天体核のスタッフになる連中も一時理論研を通過してみんな活躍した. 戦前からの人が抜けた後の人事が上手やったということですよ. ああいう素粒子まで含めて流行りをなして, それで理論研にこう集まってくる. 学間に勢いがあったんですよ. 旬の人を次々と採るというかね. それでワーワーやってるうちに基研の一部になっちゃったけどね.

(第10回に続く)

## 謝 辞

本活動は天文学振興財団からの助成を受けています.

## 参 考 文 献

- [1] 佐藤文隆『転換期の科学』(青土社)第9章
- [2] 佐藤文隆・武藤二郎『自然』(中央公論社)1971年3月号

### A Long Interview with Prof. Humitaka Sato [9]

Keitaro TAKAHASHI

*Faculty of Advanced Science and Technology,  
Kumamoto University, 2-39-1 Kurokami,  
Kumamoto 860-8555, Japan*

Abstract: This is the ninth article of the series of a long interview with Prof. Humitaka Sato. In 1985, he joined the nuclear astrophysics laboratory at Kyoto University as a professor, where he worked for about 16 years. As is written in the last article, during this time supernova 1987A occurred, and research activities that had a major impact on observational research in Japan were conducted. On the other hand, Prof. Sato also contributed to various tasks and issues within the Kyoto university as a professor and as the Dean of the Faculty of Science. This time, he talks about the state of Kyoto University in the 1990s, such as education at Kyoto University, university entrance examinations, high-school physics textbooks, reformation of graduate schools, and land issues within the university.